

# 「事実」だが「真実」ではなかった世界首脳のパリ大行進

2015・02・28 長谷川千秋

2015年は、イスラム過激派の国際テロ組織を背景とする複数犯によるフランスの週刊新聞「シャルリー・エブド」への襲撃、記者・作家・警官ら12人殺害という不幸な事件で幕を明けました。同紙はイスラム教の預言者ムハンマドを風刺する漫画をしばしば載せていました。事件は新聞、テレビで大々的に伝えられ、1月11日には「テロに屈するな」「表現の自由を守れ」と、パリを中心にフランス全土で約370万人が参加、第2次世界大戦・パリ解放時以来という大規模なデモ行進に発展しました。

これを後押ししたのが、仏オランド大統領の呼びかけに呼応した各国首脳の行進でした。独メルケル首相、英キャメロン首相はじめ欧州を中心に世界中から要人がかけつけました。パリ行進の出発点、共和国広場のものすごい人の群れを、空撮写真で記憶にとどめた方も多かったでしょう。あの中に首脳たちもいるんだ、と私は思っていました。

ウェブサイト「マガジン9」の定期連載コラム「映像作家・想田和弘の『観察する日々』1月21日号」を開けた瞬間、目が点になりました。想田さんは、仏テレビ局が流した映像からとられたという12日付の英インデペンデント紙（電子版）掲載の、ご覧のような写真を紹介。添えられた英文の記事によると「首脳らは民衆たちのデモ行進に参加し、その先頭で腕を組んだわけではなかった。なんと彼らがいたのは、民衆が入れないように囲われた市内の一角であり、写真撮影用に設けられた『安全地帯』であった…」そうです。

警備上の理由からこうなっただろうことは、参加したVIPも、周囲を取り囲んだ警備陣も、取材した報道陣も知っていたはずですが。私はグーグルで「シャルリー デモ行進」と検索してみました。「画像検索結果」の項を開くと、ドイツ経済ニュース（DWN）など同じ図柄の写真がわずかながら見つかりましたが、世界に配信された首脳たちの報道写真のほとんどは、地上の立ち位置で撮ったものでした。YouTubeの動画でも同様です。だから行進の最前列にいと錯覚させられるのです。

私は、だから各国首脳の行進はサル芝居だったと全否定するつもりはありません。ただ、「私はシャルリー」一色に染め上げられるような社会は怖いのです。多様な価値観を許さない軍国主義の世を日本も経験してきました。その意味で、日本のマスコミが、権力者たちのパリ行進の「真実」を今日に至るまで一言も伝えないのが気になります。



2015年1月12日付の英インデペンデント紙(電子版)掲載の写真